遷延性・慢性咳嗽患者の咳嗽誘発因子と病態との関係

松本久子　井上英樹　新実彰男　伊藤功朗　山口将史　陣内牧子　大塚浩二郎
竹田知史　小熊　毅　中治仁志　田尻智子　岩田俊之　三嶋理晃
(京都大学大学院医学研究科呼吸器内科学)

【背景・目的】咳嗽の性状や出現時間帯から、慢性咳嗽の原因疾患や病態を予測することは困難とされているが、咳嗽の誘発因子と病態との関係は不明であり、遷延・慢性咳嗽患者において咳嗽誘発因子と咳嗽の原因疾患・病態との関係を明らかにする。

【方法】咳優位型喘息・咳喘息140例（男性57例、平均年齢50.8歳）と非喘息性遷延・慢性咳嗽54例（男性24例、49.3歳）において、先行研究（ATS2006, A373）で明らかにした18因子が咳嗽を誘発するか否かについて問診表から回答を得、咳嗽誘発因子と原因疾患、気道過敏性、呼気NO、血清IgE、胃食道逆流問診（FSSG）点数、咳感受性との関係について解析した。また咳嗽出現の季節性などについても問診した。

【結果】誘発因子数は咳優位型喘息で最も多く、FSSG点数とも相関した。冷気・疲労ストレスが喘息性咳嗽例において非喘息性例に比し有意に多い誘発因子であった。冷気での誘発は気道過敏性亢進と、後鼻漏は呼気NO高値と、花粉・カビ臭は感作抗原数や血清IgE高値と関連したが、咳感受性と関連する因子はなかった。因子分析では[冷気・疲労ストレス・喘息性咳嗽・気道過敏性亢進・呼気NO]、[喉頭違和感、乾燥した空気、香辛料]の2因子に分かれた。また喘息性咳嗽例では非喘息性例に比し咳嗽の季節性を認める傾向にあった。

【結語】咳嗽誘発因子の一部は咳嗽の病態を反映する可能性が示唆された。